福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより

Tempus

Tempus Fugit —— 時は過ぎゆく

FUKUZAWA YUKICHI MEMORIAL
KEIO HISTORY MUSEUM

No.03
Oct. 2022

光陰如矢 かつてと今と

『学問のすゝめ』が結んだ、ことばによる戦いの地

千葉県成田市に広がる一面の美田。ここはかつてひょうたん型をした沼地でした。長沼村は、田畑にできる土地が乏しく、江戸時代から沼の所有を藩に正式に認められ、独占的な捕魚採藻が生活を支えていました。ところが明治維新後まもなく、沼の利用を希望する近隣15か村が、権力を笠に着た県の役人を動かして長沼は一方的に官有地に編入され、長沼村民は困窮に陥ります。泣き寝入りしかけたとき、村民の一人が手にしたのが『学問のすゝめ』でした。政府に不平があれば、静かに訴え出て、どこまでも遠慮無く議論せよと説くこの本、そして著者の福澤諭吉に出会い、村民は四半世紀に及ぶ戦いを根気強く継続するのです。

参謀本部作成「千葉県下総国香取郡西大須賀村及同国下埴生郡荒海駅近傍村落」(1882年)から長沼部分と、昭和期の干拓によって水田地帯となった現在の長沼跡地(2022年8月)

長沼をめぐる人とモノ

都倉武之

急遽学問のすゝめ150年を企画展のテーマとすることになった。経緯は複雑ではなく、春季企画展の「慶應野球と近代日本」にたいそう手こずり、図録も大幅に遅れるなどして、秋に予定していた「曾禰中條建築事務所と慶應義塾」の展示準備が進められなかったことが原因だ。展示館開設を機会として、ぜひ調べてみたいと急くあまりこの事態となってしまったことをお詫びしたい。

『学問のすゝめ』は研究蓄積があるので、さらにトピックを絞り込み、展覧会特有の実物を見せる面白さを意識して構成できるのではないかという考えからの選択となった。その結果ターゲットとしたのが『学問のすゝめ』と関係が深い「長沼事件」である。事件の最重要人物である小川武平の玄孫である小川不二夫さんに連絡したのは7月になってからであった。

長沼事件は、福澤を語る上で重要なトピックであるが、私には心残りがあった。それは2009年に東京・福岡・大阪で開催した慶應義塾創立150年記念の福澤諭吉展では、長沼を取り上げられなかったことだ。事件関係の重要な実物資料を、慶應義塾が何も所蔵していなかったため、展示の前提となるモノの存在を欠き、数ある福澤の事績を語るモノを絞り込むことに苦労するなかでは、検討対象にする余裕がなかった。

私が長沼の方々と接点を持ったのは2010年になってすぐだった。長沼事件への福澤諭吉による25年以上の助力の恩義から、旧長沼村の人々は100年以上にわたって年に数回福澤家を訪問して感謝を表し続けていた。しかし福澤宗家の福澤範一郎さんがご高齢になられ、その100年以上の習慣を2009年をもって辞退された。細かい経緯は失念したが、その代わりとして福澤ご命日法要に長沼の代表の皆さんが参列されることになり、その調整の一端を担わせて頂いた。長年にわたり長沼の問題に関心を持っていた西川俊作元福澤研究センター所長と連絡をとりあった記憶がある。2月3日の福澤命日が近づいてきた頃、電話を頂いたがあいにく不在にしていてお話しできなかった日の夜、西川さんは忽然と急逝されてしまった。

2010年2月3日、長沼の皆さんは三田を経て、麻布善福寺での法要へ参列し、清家塾長や福澤諭吉次男捨次郎の子孫になる福澤信雄さん、武さんと対面された。その後1月10日の福澤誕生日の式典にいらしたこともあった。現在は長沼の役員の方々が、秋に墓参される形になったとうかがっている。

1959年、長沼下戻60周年に際して記念碑前で。後列碑の前に右より小泉信三、福澤洸二郎、福澤範一郎。前列左から2人目大木忠造。

今回の展覧会が決まって、私が専門員の横山寛さんとともに初めて長沼を訪問したのは8月8日であった。かつての村といえどもだいぶ様変わりした風景を想像していたが、事件当時とほぼ変わらぬ100数世帯、長沼村が「豊住村長沼」になっても、「成田市長沼」になっても、そのコミュニティーはまさに「長沼村」と呼ぶに相応しい強固なものだった。

1年交替で引き継がれてきているのが長沼区長の役職で、副区長と支部長を加えた3人が3役と呼ばれ、8つの班に班長さんがそれぞれいらっしゃる。江戸時代の村方三役を連想させるもので、8班での連絡網も、少なくとも明治時代の資料では確認できた。

現在の区長は成毛政男さんで、一度しか回ってこない役目の年に、よりによって「あれはないか」「これはどこだ」という、私の迷惑な問い合わせを急に次々と受ける災難にお付き合い頂いたことをお詫び申し上げたい。

最初に成田駅に車で迎えて頂いた坂本公男さんは福澤家に寄留して、時事新報や交詢社で事務を執っていたと伝わる坂本源太郎のご親族で、資料を持参して駆けつけて下さった大木利夫さんは、福澤と直接会ったことがある最後の村民だった大木忠造さん(特選塾員)のご親族。出山昭さんは小泉信三を招くなどして盛大に行われた60周年の時の区長だった出山市平さんのお孫さんで、式典での奥井復太郎塾長の祝辞などをご寄贈頂いた。

長沼村には今も福澤とのゆかりを確認する機会として、毎年3月29日に「御事(おこと)」と呼ばれる儀式がある。本来は農耕はじめの儀式なのだが、ここ長沼村では、福澤の協力を得た25年以上にわたる沼の所有権を賭けた闘いの経緯を刻んだ鎌田栄吉塾長撰文の3メートルを超える巨大な石碑の前に代表が集い、福澤の肖像とお餅と清酒を供え、万歳をする。かつてはすぐそばに福澤の助力でできた長沼小学校の木造校舎があり、ここから村民が総出で、「長沼下戻記念の歌」を歌いながら、練り歩いた。その歌は今では歌われる機会が無くなってしまったが、その歌詞に「九姓の

勲」という言葉がある。長沼には9つの姓しかなく、その人々が一致して戦ったという意味である。出会う人々誰もが、古文書の中の長沼村の人々の末裔なのである。長沼の方と話していると自然と「福澤先生」という言葉が出てくるのも不思議な気持ちになる。持ち寄って頂く資料の中に、慶應義塾関係者の名前が次々に出てくる。そして福澤諭吉自筆の書き付けもその中に確認された。

長沼村の資料だけでなく、今回は近隣村も含めて周辺地域全体からこの長沼事件を見てみたいと思ったが、十分掘り下げるには少々時間がなさ過ぎた。それでも長沼と一時は激しく対立した旧宝田村の所蔵資料を加えることができたのは、成田市の長年にわたる市史編纂事業のおかげである。郷土史の調査の過程で確認された資料は、成田山霊光館、成田市立図書館の収蔵となっているものが多く、その膨大な資料を収集し、それと向き合い、市史編纂に関わってこられた方々の熱意と根気には、実に多くのことを学ばせて頂くことができた。なかでも長年その資料の整理に携わられてきた大里富枝さんには、かなりの無理をお願いし、作業の合間には、長沼事件について多くのことを書き残している高柳正平さんのユニークなお人柄、村の歴史に精通し、干拓事業にも深く関わられた成毛武さんのこと、幼少の頃に見た「おこと」のにぎやかな風景の思い出などを聞かせて頂いた。

長沼小学校は今はないが、合併された豊住小学校は、長沼と福澤の縁から、校訓「独立自尊」が定められ、たまたま訪問した時に、児童が調査した長沼事件や独立自尊についての掲示物を見せて頂いたので、これも展示に加えさせて頂くことにした。事件についての素直なまとめになっており、もし本展の解説が難解であったら、小学生たちのまとめを見てもらったほうが、何よりもわかりやすいかも知れない。この事件を通して「独立自尊」という言葉について考えるのは、非常に教育的な光景であると感じた。

もう一つ今回の展覧会の実現に重要な転機となったのは、2013年頃から、長沼に関係する資料が古物市場に現れたことである。戦後間もない福澤諭吉全集編纂の頃にはすでに所在がわからなくなっていた福澤自筆の事件に関する願書の下書などが、分散して京都などで出品され、慶應義塾の所蔵に帰した。おそらく目の行き届かなかったものがあり、いくつかいまだに不明な資料がある(例えば木村芥舟が長沼村民に送った書が一緒にあったと考えられるが不明)。これはまさにこの事件を語る上で、無二の資料であり、これがなければやはり展示は成り立たなかったであろう。

1959年、三田キャンパスを訪れた長沼の代表者たち。

1987年、福澤範一郎邸を訪れた長沼の代表者。左端に長沼事件の調査を重ねた若き日の幼稚舎元舎長の加藤三明さん。

今や事件の舞台である「長沼」そのものはほとんど痕を留めない。その跡地は広大な水田地帯となったが、今ではかつてのようにこの集落を強固に支える収入源とはなっていないという。3月29日に実感がこもらなくなるのも無理はない。

この事件は地域間の紛争の片方に福澤が肩入れした、というものではない。明治維新後、地域の実情に耳を貸さずに政府が一方的に土地利用の方針を処断した官尊民卑に対する異議申し立てという構図において『学問のすゝめ』の介在が意味を持つ。そこから学ぶことは、どのように人々が社会と関わり、どのように社会を作っていくかという、今生きる社会のあり方の根本ではないかと考えている。

9月5日の訪問時に小川不二夫さんから新たな資料を一箱託された。それを開いたときに、すぐに目に入ったのが慶應義塾図書館の初代館長田中一貞の小川武平宛書簡であった。1912年5月すなわちいま展示館があるこの図書館が開館した翌月のもので、開館にあわせ、長沼関係資料が展示できることへのお礼状であった。今回展示する資料の一部は、110年ぶりで、同じ建物の中に並んだのである。今回の企画展を通して、改めて人とモノが歴史を紡いでいくことを実感することとなった。

千客万来

寄せられた声から ―「慶應野球と近代日本」展を中心に―

《 》=館からのレスポンス

渡辺泰輔さんの展示―塾高時代のクラスメートだったので、完全試合も観戦。60数年前の記憶を呼び起こしました。**《このたび完全試合時のグラブとボールをご寄贈いただきました》**／全体的に非常に興味深かったですが、早稲田大学野球部からの挑戦状現物を見られて感動しました。／慶應野球の企画展を見に来ましたが常設展も興味深いものがありました。個人的には所属していたパトリック倶楽部のボールがあったのが嬉しかったです。／第二回甲子園普通部プレート、前田祐吉監督語録、リンゴ事件で旗手の剣道部員に贈られた塾旗、応援団上限250人のところ早稲田が2000人を動員したと糾弾した三田評論など。／資料の説明も時間をかけられた跡があり、これだけのものを展示されるのには大変なご苦労だったと思います。また、野球部の順位年表を視て、私の在学中が一番弱かった時代、5位-5位-6位-5位-5位と塾野球部に失望していた時代は実は1925年から2022年の間の最も苦しい時代だったことを知りました。／野球の企画展がよかったので、ラグビーなども可能ならやってほしいです。／慶應は体育すいせんがないことや、ぼうずを強制しないことや、勉強もしっかりやることがよいと思いました。／最近貴館の存在を知り、はじめてたずねましたが、通路がひろめで、みやすい工夫がなされていることが印象的でした。野球関連では、あえて“慶早戦”ではなく、一般的な“早慶戦”を用いられているのですね。**《この点は案外異論は出ませんでした。大学の掲示なども実は、多くは早慶戦と表記されます》**／貴重な史料がこれほど多く保管されていることに心が躍りました。同時に、慶應義塾大学の歴史と伝統を大切にされている姿勢がものすごく伝わってきました。／私は2年浪人して入学入部しましたが、4月早々に前田〔祐吉〕さんは「浪人してまで大学で野球をする意味は何か。」と話をされました。目的と目標の違い、エンジョイベースボール、自主性、虚礼の廃止など。まさに目から鱗が落ちました。アメリカ遠征といえば、その夏のオープン戦で不甲斐ない試合の後で説教がありました。アメリカ遠征で原書の野球専門書を買ってきた者がいなかったことに激怒されました。折角ベースボールの本場に行きながら原書で学ぶ意識がなかったことは今から考えても幼稚でした。（猿田和三）**《貴重な思い出をお書き下さりありがとうございます。前田監督らしいエピソードで図録にも紹介したかったです》**

企画展示室の今後の予定

2022年度

慶應義塾福澤研究センター新収資料展
2023年1月10日～2月4日

中津市連携企画
名勝指定100年記念　耶馬渓展（仮）
2月21日～3月11日

文学部古文書室主催
文学部古文書室展（仮）
3月14日～3月28日

2023年度

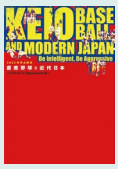
企画展　曾禰中條建築事務所と慶應義塾
（来年度に延期となりました。）

慶應義塾史展示館の図録

『福澤諭吉記念慶應義塾史展示館開館記念図録』
A4判　24頁
2021年7月4日発行
800円

『慶応四年五月十五日―福澤諭吉、ウェーランド経済書講述の日』
A4判　76頁
2021年10月9日発行
1200円

『慶應野球と近代日本“ヘラクレス”から“Enjoy Baseball”へ』
A4版　112頁
2022年7月30日発行
1800円



『福澤諭吉と『非暴力』―学問のすゝめ150年―』
A4版
2022年10月発行予定

当館常設展示室受付、カフェ八角塔、三田インフォメーションプラザのほか、
慶應義塾公式グッズサイト（https://keiogoods.jp/）からもお求めいただけます。

基本情報

開館年月日　2021年7月5日
空間デザイン　槇総合計画事務所
展示設計製作　株式会社トータルメディア開発研究所
床面積　常設展示室:280.44㎡　企画展示室:60.99㎡

スタッフ一覧

館長　平野　隆
副館長　都倉　武之
所員　西澤　直子（兼運営委員）
所員　阿久澤　武史、井奥　成彦、クラシゲ,ジェフリー　ヨシオ、小山　太輝、齋藤　秀彦、末木　孝典、山内　慶太、結城　大佑
専門員　横山　寛
事務局　福澤研究センター　兼務

来館者数

2022/5	2022/6	2022/7	2022/8	2022/9
1360名	1943名	2358名	3019名	942名

諸記録

6月6日～8月13日	春季企画展「慶應野球と近代日本」“ヘラクレス”から“Enjoy Baseball”へ（9月3日まで延長）
6月9日	第1回所員会議
6月11日	企画展記念講談会・応援指導部アトラクション　第1回
6月23日～8月31日	ペンマーク入り万年筆（沖縄戦激戦地で発見）特別出品
6月25日	企画展開催記念講演会・シンポジウム
7月5日	開館1周年記念品プレゼント
7月14日	第1回運営委員会
7月16日	企画展記念講談会・応援指導部アトラクション　第2回
7月19日～12月31日	野球伝来150年聖地・名所150選に綱町グラウンド選出（当館がスタンプラリーポイントに）
9月30日	第2回運営委員会

福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより
Tempus（テンプス） No.03

発行日　2022年10月17日（年2回発行）　印刷　（有）梅沢印刷所
編集・発行　福澤諭吉記念慶應義塾史展示館
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45　電話 03-5427-1200　https://history.keio.ac.jp/

各種SNSはこちら　@keiohistory　@keiohistory　@keio_history